

剣影、桜下に哭く

剣客黒須新九郎 城戸家騒動録

五月雨 輝 Teru Samidare



アルファボリス文庫

<https://www.alphapolis.co.jp/>

目次

第一章	春の嵐	5
第二章	炎塵剣風の屋敷 <small>えんとけんふうのやか</small>	38
第三章	蕾光る家と雲陰る城 <small>つぼみ</small>	71
第四章	花の笑顔と燕の涙	131
第五章	命運斬開の弧剣	179
第六章	桜の落ちるその唇に	220
第七章	真実は、共に光と影の中	256
第八章	逆転の広間	297
第九章	焰 <small>ほのお</small> 、未だ燃え尽きず	339
第十章	春の風	370

第一章 春の嵐

一

出会いと別れは突然やってくるという。

だが、災難もまた突然やってくる。

その日は二月の中旬にしては日差しが強く、汗ばむような陽気であった。黒の小袖に裁着袴たつぽかまをつけ、網笠を被った一人の青年が、釣竿と魚籠いしがらみを持って城下を歩いていた。

青年の名は黒須新九郎くろすしんくろう、二十一歳。藩の郡方こむかたに勤める中級の藩士である。

この日、新九郎は非番で、早朝から趣味の川釣りに出かけて、春木町はるきちょうにある屋敷に帰ってくるのであった。

網笠の下、やや眉が濃いが整った顔には微かな笑みが浮かんでおり、この日の釣果が上々であることを物語っていた。

自邸の門を潜ると、ちょうど女中のりよが玄関前を掃除していた。

「お帰りなさいませ」

りよは新九郎に気付くと、簪を持つ手を止めて振り返った。

一月ほど前に、ふとした縁から新しく雇った女中であつた。目尻がやや上がり気味で、見方によってはきつい顔立ちにも見えるが、筋の通つた細い鼻、薄く朱を引く小ぶりの唇がよく整つており、美人であつた。

「よく釣れたのですね」

りよはにこりとした。春の陽光に照らされて笑顔はより美しく見え、女中であるにもかかわらず、新九郎は思わずどきりとした。

が、誤魔化すように咳払いをして、

「何故わかつた？」

「お顔が明るいですもの。釣れなかつた日はいつも暗い顔でございますから」

「私はそんなに顔に出るか」

新九郎は苦笑した。

「山女魚は釣れなかつたが、岩魚が五匹だ。夕餉に食べよう」

新九郎が魚籠の中をりよに見せると、

「はい、炭火で塩焼きにいたしますね」

と、りよは魚籠を受け取った。

その時であつた。

門の外から、怒鳴るような大きな声が聞こえた。

「黒須新九郎はいるか？」

新九郎が振り返ると、開けたままの門の向こうに、横目付の佐久間甚兵衛が立つていた。背後には二人の徒目付もいる。

「これは佐久間さま。如何されましたか？」

非番の日に横目付の突然の訪問。只事ではない。驚きながら訊くと、佐久間は新九郎を一瞥した後にその目を鋭く奥の屋敷に走らせた。

「黒須新九郎、その方に役目を利用した横領、及び抜け売りの疑いが出ておる」

「横領？ 何のことでございましょう？」

新九郎は我が耳を疑つた。

新九郎は郡方で小物成役を務めている。

担当は領内南西の鉢窪村とその支村で、鉢窪村で栽培されている青苧（織物の糸がとれる草）と、それから作られる藩の特産品である縮（織物の一種）の生産と納品を管理している。

藩では青苧の栽培を奨励しており、また、それを利用して作る独自の縮を藩専売の特産品として管理し、京や大坂を通じて全国に販売し、重要な財源の一つとしていた。

「家老の大鳥さまが、鉢窪村の青苧の取れ高と、納める縮の量が、ちょうど一年前から大幅に減っていることを指摘されてな。そこで調べたところ、鉢窪村の担当であるその方が横領して抜け売りしたのではないかとの疑いが出たのだ」

と、横目付の佐久間は述べたが、

——何を言っているのだ？

新九郎は呆然とした。そのようなことをした覚えはないし、するはずもない。何故突然、そのような嫌疑がかけられたのか。新九郎はすぐに反論した。

「いや、私ができるようなことをするはずがござりませぬ」

「だが、鉢窪村からの納入量が減り出したのはちようど一年前で、その方が鉢窪村の担当になったのと同じ時期なのだ。そして何より、郡奉行の松山さまが、その方が作成した小物成帳を検めたところ、ちようど一年前から改竄されている跡が見られたのだ」

「馬鹿な。全く身に覚えがございませぬ」

「ほう。違うと？」

「もちろんです」

「では、ちと屋敷内を調べさせてもらうが、構わぬか？」

「ええ。どうぞ」

落ち着きを取り戻し始めた新九郎は、笑みを見せて答えた。

「よし。では失礼する。行け」

と、佐久間は従えて来た徒目付二人に命じ、自らも「御免」と屋敷内に入った。

「旦那さま……」

りよが魚籠を抱えたまま不安そうに言くと、騒ぎを聞きつけた新九郎の五歳下の妹の

奈美も屋敷から出て来た。

「兄上、どうされたのですか？」

「さあな。俺にもわからん。だが心配するな、何事もない。二人とも中に入っている」

新九郎は笑って二人を促した。

しかし、それはすぐに覆された。

「何だ、これは？」

徒目付の一人が、庭の納屋の前で大声を上げた。

新九郎が行ってみると、横目付の佐久間もあり、中を指差した。

「この沢山の縮はなんだ？ 何故お主の納屋にある？」

中を見た瞬間、新九郎は目を疑った。

白っぽく埃漂う納屋の奥に、覚えのない縮が沢山積み上げられていたのだ。

「何故、このような物がここに……」

新九郎が呆然と呟くと、

「それはこちらが訊きたいことじゃが、とにかくこれはお主が鉢窪村から横領した物で間違いないだろう」

「いや、佐久間さま。これは何かの間違いでござる。私はこのようなことはいたしません」

「では、何故ここに藩専売の縮がこのようなに沢山あるのだ」

「それは私にも……何故ここに縮が……とにかく私には身に覚えのなきこと」

新九郎は狼狽しながらも佐久間に訴えたが、佐久間は険しい目つきで新九郎を見て、「とりあえず、評定所まで来てもらうぞ」

と、徒目付二人に新九郎の両脇を固めさせた。

「わかりました。しかし、流石にこの格好のままでは城へは上がれませぬ」

新九郎が言うと、佐久間は新九郎の溪流釣りで汚れた小袖と裁着袴を一瞥した。

「そうだな。では急ぎ着替えて参れ」

新九郎は屋敷内に入り、袴姿に着替えて再び出て来た。

女中のりよ、妹の奈美も、色を失った顔でついて出て来た。

新九郎は努めて穏やかな声で、その二人に言った。

「案ずるな、私が不正などするはずがないだろう。誤解だ、すぐに戻る。おりよ、夕方までに岩魚を焼いておいてくれ」

だが、事は新九郎の言う通りにはいかなかった。

城の二の丸曲輪の一角にある評定所。

そこに押し込められた新九郎は、早速、横目付の佐久間の尋問を受けた。

「黒須。これはお主が作成している鉢窪村の小物成元帳だな？」

佐久間は、持って来た帳簿を新九郎の目の前に置いた。

「そうでございます」

新九郎が表紙を確認して答えると、佐久間はぱらぱらと中をめくって、

「見よ。ちようどお主が担当になった一年前に納入量が急減し、以後ずっとこの調子だ」

「これは確かに……」

新九郎は、見るなり目を瞠ったが、すぐに顔を上げて、

「しかし、おかしゅうございます。はつきりとは覚えておりませぬが、私も実地にて検分しております。このように納入量が大幅に減ったような記憶はございません。先々月もこのような数字ではなかったはず」

新九郎が不審を指摘すると、佐久間は扇子の先で帳簿を突いた。

「そこでじゃ。一年前からの数字をよく見てみよ。書き換えた跡がある」

新九郎が覗き込むと、確かにそこには元あった数字を何かで巧妙に削り取り、上から新たに書き入れたような跡があった。

「まことに……しかし、何故このような……」

新九郎は啞然としたが、少し考えた後に、

「いや、佐久間さま。これは何者かが私を陥れようとする陰謀でございましょう。私はこのような改竄はしておりませぬ」

そう訴えた新九郎を、佐久間はじろりと見た。

「経緯はこうじゃ。先日からの重役会議で、家老の大鳥さまが鉢窪村の昨年からの青芋や縮の納入量が急減していることを指摘され、産物方とその上の勘定奉行の柿崎さまを追及したのだ。だが、柿崎さまと産物方は何もおかしいところはないと撥ね付け、対

して大鳥さまも更にいくつかの資料を出して追及し、会議の度(たび)にこのことで採(と)めていた。すると一昨日(おととい)、郡奉行の松山さまが、鉢窪村は黒須の担当だと言った上で、この元帳を持って来させて聞くと、この有り様だった」

佐久間は扇子を動かしながら、

「そこで松山さまが言われたのだ。その方が鉢窪村の担当であることを利用して横領し、帳簿の数字を後から密かに書き換えたのではないかと」

と、言ったが、新九郎には当然覚えがない。

「それこそ別の者でしょう。本当にやった者が、露見しても全て私に罪をなすりつけられるよう、私の作成した帳簿を密かに書き換えたのでしょう」

「ふむ。だが、松山さまの指摘を受けて今朝、その方の屋敷を調べたところ、納屋で横領したと見られる沢山の縮が見つかったではないか」

佐久間が言くと、新九郎は顔を青くして絶句した。

「あれこそ、その方が横領及び抜け売りをしたという動かぬ証拠ではないか」

佐久間は扇子の先で元帳の上を突いて言くと、新九郎はうなだれた。

「それこそわけがわかりませぬ。あの縮も、全く身に覚えはございませぬ。何故私の家であのような縮が見つかったのか……」

新九郎がそこまで言って言葉に詰まると、佐久間は薄笑いを浮かべて新九郎を見た。

「あまり言いたくはないが……お主の家は戦国期から城戸家に仕えて来ているとはいえ、

祖先は元々足輕故に禄高は低いな」

「はい……」

「それ故に、筆頭家老の小田さまをはじめ、執政の方々は皆、黒須ならば暮らしに困った末に不正に手を染めてもおかしくはない、と言われておる」

佐久間が薄笑いのまま言くと、新九郎は思わず目を剥いた。

「確かに当家は七十石。ですが、両親はすでになく、姉も他家に嫁いでおり、今は私と妹だけです。暮らしには困っておりますぬ」

更に新九郎は続けて、

「今、佐久間さまが言われた通り、我が黒須家は元は足輕とはいえ、戦国期より藩祖城戸頼龍公に仕えて来ております。その上、祖先の作十郎は藩祖頼龍公より直々に剣の奥義を伝授され、その技を代々受け継いで来た家です」

そして新九郎は膝を進めた。

「その黒須家の私が、このような不正をするとお思いですか」

新九郎の目は二重瞼ではつきりとしており、瞳の光も強い。佐久間は、真っ直ぐに見つめてくる新九郎の目力に一瞬気圧されたような顔をしたが、すぐに取り繕って、

「お主の言い分はわかった。とりあえずはここにおれ。追って沙汰を出す」

と言って立ち上がると、

「だが、お主の家で現物証拠が見つかったのは事実。覚悟はしておくがよい」

と、冷たく言い残してから、徒目付たちに何か言いつけて出て行った。

こうして、新九郎は評定所押し込めとなつてしまった。

——何故このようなことに。

新九郎は、一人取り残された評定所の中で呆然としていた。

突然かけられた嫌疑だが、まるで覚えがない。

——納屋にあつたあの縮、あれは何だ？

横領の証拠とされ、黒須家の納屋で見つかった沢山の縮。あのようなもの、もちろん自分で運び入れた覚えはないし、するわけもない。

一昨日、探し物があつて納屋に入ったが、その時にはあの縮はなかった。

——俺が不在の時に、本当の犯人が俺に罪を着せる為に運び入れたのか？

新九郎は、まずそう考えたが、だとしたら、それはいつ、どうやって行つたのか？

——考えられるのは昨日登城していた間、そして今朝釣りに行つていた間だ。だが、その時間はおりよと奈美がいた。何者かが侵入すれば気付いていたはずだ。

新九郎は苦しい顔で頭を掻いた。

——いや、それより誰だ？ 誰が俺を陥れようとしている？

しばらく考え込んだが、答えは闇の向こうにあるようで見えてくる気がしない。

その夜、新九郎は眠れなかった。

佐久間に言つたように、黒須家の祖先、黒須作十郎は輕輩ではあつたが、戦国期より

藩主の城戸家に仕えて来ており、家臣としての歴史は古い。

戦国期、とある戦で藩祖城戸頼龍が危機に陥つた際、黒須作十郎が属する部隊が奮戦して頼龍を守つたことがあつた。その時、作十郎の働きが際立つていたことから、頼龍は直々に作十郎に褒美を出そうとした。だが作十郎はそれを断り、代わりに劍豪としても知られた頼龍に、劍の技を一つ教えて欲しいと願ひ出た。

頼龍は快諾し、自身が持つ秘技を一つ、直々に伝授した。猛稽古の末にその技を会得した作十郎は、頼龍にこう誓つたという。

「殿直伝のこの技、それがしは子々孫々に伝えて行き、御家に危機があればこの技でもつて救わせます」

ところが今、御家を救うどころか、御家に背いているような立場にされてしまった。

このままでは、新九郎の命どころか、黒須家も取り潰されるであろう。

——祖先作十郎さまに申し訳が立たぬ。それに、奈美だってまだ嫁に行つていないのに。様々な想いがぐるぐると新九郎の脳内を回つた。

最後に、女中のりよの顔が浮かんた。ややきつめの顔立ちだが、美しい笑顔。

——りよはどうなる……いや、りよにも、もう会えなくなるのか。

そう思つた瞬間、新九郎は自らの胸の内の声に、はつとして首を振つた。

——何を考えている。りよは女中だぞ。

新九郎は想いを振り切るように目を閉じた。

だが、いくら臉を塞いでも、そこにはりよの白い顔がいつまでも残っていた。

そして、評定所に押し込められてから翌々日の夕刻。

不意に襖が開き、横目付の佐久間と共に現れた人物を見て、新九郎は慌てて平伏した。佐久間を従えて現れた者、それは大目付の石川左内であった。

――終わるか。

新九郎は絶望に目を閉じた。

大目付が直々に来たということは重い処分が決まったということだ。

間違はなく切腹であろう。

だが、大目付石川左内は意外なことを告げた。

「黒須新九郎、一旦その方を解放する」

新九郎は、驚いて顔を上げた。

「確かにその方の屋敷で見つかった縮は決定的な証拠かと思われた。だが、執政衆の一人が、それだけですぐに処分を下すには早すぎると強く主張されてな。そこで、悪いがその方の屋敷と周辺を更に調べさせてもらった。だが、その方が横領や抜け売りをしていたような痕跡は一切見つからなかったのだ。これはもしかしたら、その方が言うように何者かの陰謀である可能性も高いと見た」

そこで、石川左内は一つ咳払いをしてから、

「だからといって、その方が不正をしていなかったとも言い切れぬ。あの帳簿の数字は明らかに不自然である。それ故に、我々でも少し調査をすることにした。その結果が出るまでは、暫時その方には遠慮を申し付ける。明日の夜からじゃ」

「明日……の夜からですか？」

新九郎は怪訝そうな顔をした。

「そうせよ、と仰せだ」

「はっ。承知しました」

新九郎は改めて両手をついた。

こうして新九郎は解放され、徒目付に両脇を挟まれながら城を出た。

二

すでに辺りは薄暗くなっている。

約二日間拘束されていた。心配しているであろう妹の奈美や女中のりよを安心させる為にも、早く屋敷に帰らねばならない。しかし、新九郎は真っ直ぐには帰らなかった。

脳裏に疑念雑念が渦巻いて離れない。それを静かに整理しようと、新九郎は城下の東側を流れる早月川に向かった。

早月川は、幅は広いが浅い清流で、対岸には田畑が広がっている先に山々が横たわり、

中秋の頃ともなればその頂に満月が美しく輝くことから、月見にやってくる者が多い。だが、城下からはやや離れている為、普段は昼も夜も人氣は少ない。

それ故に、新九郎は何かあるとよく一人でここにやって来て、土手や川岸に座り込んで物思いに耽っていた。

今日の夜空は雲もなく晴れ渡っており、川面が月光を碎いて煌めかせていた。

誰かが椅子代わりにでも置いたのか、葵びた丸太が打ち捨てられている。新九郎はその上に腰かけ、静かな音を立てる早月川の流れを見つめた。

——何かおかしい。

全く身に覚えのない不正の嫌疑。そもそもそれ自体がまずありえないことなのだが、帳簿の数字改竄と、納屋の縮という現物証拠が見つかったにもかかわらず、証拠不十分として釈放された。

しかも、目付衆の調査結果が出るまでは遠慮処分だという。

遠慮は、処罰としては最も軽い。日中は外出も人に会うことも許されぬが、夜間の外出などは黙認されている。証拠不十分で釈放とはいえ、今回ほどの事件であれば遠慮などではなく、逼塞や閉門を命じられて当然である。

それが遠慮で、しかも何故か明日の夜からだという。おかしい話である。

——執政衆の間で何か採めているのだろうか？

現在、藩の執政部は筆頭家老の小田内膳と、他に次席家老の大鳥順三郎、斎藤

内蔵助の二人の家老、そして勘定奉行の柿崎忠兵衛、新九郎の上司にも当たる郡奉行の松山帯刀たちである。

その中で、現在最も権力を有しているのが筆頭家老の小田内膳である。小田は、一昨年急逝した先代藩主に拔擢されて一代家老となったが、その優秀さによって筆頭家老にまで上り詰め、今や絶大な権力を握って派閥のようなものまで形成している。しかし、その小田の専横を次席家老の大鳥順三郎は快く思っておらず、何かある度に小田と大鳥は激しくぶつかり合っていた。

新九郎を巡る処分の二転三転は、それと関係があるようにも思える。

ふと、新九郎は、大目付の石川左内が言った言葉を思い出した。

石川は、執政衆の一人が、処分を下すには早すぎると強く主張した、と言っていた。
——それは誰だったのだろうか？ 訊いておけばよかったな。

新九郎は、早月川の流れの音を聞きながら考え込んだ。だが、いくら考えたところで、一介の藩士である新九郎にわかるわけがない。

何より、およそ二日にわたる拘束で心身ともに酷く疲れていた。

——もういい、帰ろう。

新九郎は立ち上がり、河岸を南へと歩いた。

と、対岸に渡れる柳橋に近くなったところで、金属音が二回、三回と聞こえた。

闇に銀光が疾り、青い火花が弾け飛ぶのが見えた。

——斬り合いだ。

新九郎は咄嗟にすぐ側にあつた柳の幹の陰に隠れ、様子を窺つた。

薄闇の向こう、柳橋の上で距離を取って睨み合う二人の人影が見えた。

——こんな時間に何事だ？

新九郎は左手の親指を大刀の柄に当てながら、目を凝らしたが、その瞬間、あつ、と思わず声を上げそうになつた。

一人が、まるで戦国期の伊賀者のような頭巾覆面姿だつたからである。

近頃、城下を騒がせている事件がある。

先月から、数人の藩士が立て続けに何者かに襲われて命を落としているのだ。

目付衆が調べてはいるが、未だ犯人はわかつておらず、誰が何の目的でそのような凶行に及んだのかは不明であつた。

だが、襲われたある藩士が、まだ息のあるうちに語つたところによると、

「相手は数人いて、濃紺の上下に頭巾と覆面、まるで伊賀者のようだった……解散したはずの、笹川組（さしかわぐみ）のような。夜なのに太刀筋は正確で鋭く、動きは俊敏……そして互いに仲間を狐とか燕とかと呼んでいた」

とのことで、城下はもちろん、家中でも不気味がられていた。

——あれが、その狐とか燕か？

新九郎は一気に緊張が高まるのを感じたが、同時に驚いてもいた。

その濃紺装束の人間と対峙している相手が知人で、勘定方に勤めている三木辰之助（みきたつのすけ）だつたからである。

新九郎と三木辰之助は、子供の頃から同じ剣術道場に通つていた間柄であつた。

だが、新九郎と辰之助は不仲であつた。どちらかといえば辰之助の方が一方的に新九郎を嫌っているのだが、嫌われていたら新九郎だって良い気はしない。新九郎も辰之助を快く思つていなかった。

——なんだ、三木か。

新九郎は急に気分が冷めて力が抜けた。

しかし、辰之助と対峙している相手が普通ではない。

間違ひなく、近頃城下を騒がせている連中であろう。しかも、見れば辰之助の方が押されてゐるようである。

——好かぬ奴だが、ここで見て見ぬふりはできん。

新九郎は刀の鯉口を切つて橋へ向かつて駆けた。

「三木、助太刀するぞ」

声をかけながら敵の右側に回り込める位置に立つと、辰之助は驚いて新九郎を見た。

「黒須？ 何故ここに」

「たまたまだ。それよりも、こやつがあの狐とか燕とかいう連中か？」

新九郎は抜刀して正眼に構えた。

「恐らくそうだ」

辰之助は、答えながら左へと動いた。新九郎とて敵を挟撃できる位置である。

対して敵は、覆面の隙間から新九郎を見た。突然の新九郎の加勢にも動じていないようであった。

敵は、小柄な体格であったが、一目で尋常ではない使い手とわかる気を全身から放ち、覆面の隙間から目を光らせて新九郎と辰之助を交互に見ている。

互いの息遣いが聞こえるかのような静寂――

と、それを突き破って相手が飛んだ。同時に、辰之助に向かって銀光が鋭く飛ぶ。

だが、辰之助はさつと後ろに飛びながらそれを弾き飛ばした。その時を逃さず、新九郎が踏み込んで左薙ぎの一閃。

隙を捉えた。やったか、と思ったが手応えどころか敵の姿もなかった。

敵はいつの間にか、柳橋の欄干の上に立っていた。

――何て速さだ。まさに燕……。

新九郎、辰之助ともに、その身のこなしに啞然とした。

二人は、かつて通っていた城下の一刀流戸沢道場で、共に席次上位を争っていた腕前である。そんな二人を同時に相手にして、敵は全く引けを取っていない。

――これは、三木と二人がかりでも勝てないかもしれん。

新九郎は正眼に構え直しながら呼吸を整えた。

だが、相手は欄干の上からじつと新九郎を見つめた後、背を返して柳橋の向こうへ飛び、そのまま闇の中へと走って消えた。

「待てっ」

と、言う間もないほどの速さで敵は消えてしまい、二人は追えなかった。

新九郎は納刀しながら三木辰之助に言った。

「あの姿、直接見たことはないが、まるで伝え聞く笹川組のようだな」

「ああ、俺も思った。だが……」

辰之助は深く息を吐きながら懷紙を出して刀身を拭った。

笹川組とは、戦国の頃より藩主の城戸家を支えて来た忍び集団である。

戦国期、彼らは平時には敵方の情報収集を行い、戦場では遊軍の一部隊を成して攪乱、奇襲などの工作を担っただけでなく、戦闘にも加わったという。

しかし、戦国期が終わるとその存在は秘匿され、藩主の命だけを受けて動く隠密集団となった。笹川組は、領内や家中で藩主が気になる不審事が起こると、藩主から直接命令を受けて独自に偵察や監視を行った。時には闇で家臣の暗殺や肅清を行っていたとも

伝えられている。

しかし、先々代藩主に暴君の気質があり、その権力で笹川組を乱用した。諫言をした家臣を笹川組に殺せたり、借金を断った城下の富商を殺せたりと、先々代藩主は笹川組を好き放題に使い、領民や藩士たちの信望を失ってしまった。

そのことへの反省から、先代藩主は跡を継いだ時に、自ら笹川組の存在を公とした上で解散させていた。

「笹川組解散から二十年以上も経っている。奴らが笹川組なわけがないと思うが」
辰之助は納刀しながら言った。

「そうだな……しかしお前、何故こんな時にこのようなところで襲われたんだ？」

「俺にわかるか。役目でちと出かけた帰り、ここで突然襲われたのだ」

「役目？ こんな時間までか？」

「どうでもよからうが」

辰之助は面倒臭そうに答えると、逆に新九郎に訊いた。

「それより、何故ここに来た？ 貴様が来なくても俺一人でどうにかできたものを」「何？」

新九郎は眉を動かした。

「貴様が来たせいで奴は逃げたのだ。貴様が来なければ俺が奴を仕留めていたものを」
辰之助は苛立たしげに吐き捨てた。

「ぬかせ。押されていただろうが。腕も斬られているぞ」

新九郎は冷ややかに辰之助の左腕を見やった。

薄闇の中ではつきりとしなが、左上腕に血の染みのようなものが見えていた。

「それは策だ。油断させておいて奴の隙を作り、仕留めるつもりだった」

辰之助は嘸ふふいた。

「強がるな。そんな余裕があるようには見えなかったがな」

「なんだと？」

と、辰之助はむっとして新九郎を睨んだが、ふと気付いて、

「お前、不正で切腹と聞いたがどうしたんだ？」

「証拠不十分ということで釈放された。だが、目付衆の調べが終わるまでは遠慮を言い渡された」

「なんだ、切腹にならずに残念だぜ」

辰之助は冷笑しながら背中を向けた。

「おい、聞き捨てならんな」

新九郎が目を怒らせてその背に詰め寄ると、辰之助は振り返った。

「やめておけ。今のお前が喧嘩騒ぎを起こしたら、目付の調べの前に確実に切腹だぞ」
辰之助は笑いながら言うや、そのまま立ち去った。

—— 本当に嫌な奴だ。助けなければ良かったわ。

新九郎は舌打ちし、不快な気分を抱えたまま再び家の方へ歩き始めた。

だがそこで突然、薄闇の中からすっと提灯ていとうの光が現れた。

新九郎は咄嗟に後方へ跳んで身構えた。

気配もなく突然出現した提灯。不快な気持ちに心が捉われていたとはいえ、全く気が

付かなかった。

——先ほどの狐とか燕とかか？

新九郎は腰を落とし、目を凝らした。

だが、提灯の向こうからは、殺気のかけらもない唖れた老人の声が聞こえてきた。

「黒須新九郎さまでございますな？」

「いかにも」

新九郎が短く答えると、

「それがし、千吉と申す者。我が主人がお呼びでございます。ご同行願えますかな」

「主人とは？」

「ここでは言えませぬ」

「ならば無理だ。私は身に覚えのない嫌疑をかけられた上、遠慮となった身。何者が私を陥れようとしているのかわからぬ今、ついて来いと言われて行けるわけがない」

すると、老爺千吉は納得したようにゆっくり首を振り、

「では、我が主人の名前を明かしましょう」

と、一歩進んで、小声でその名を囁いた。

聞いた瞬間、新九郎は「まことか？」と、目を瞠った。

「これでも？」

老人は、懷から匕首を出して見せた。

新九郎は一瞬ぎよっとして身構えたが、その鞘に描かれている家紋を見て領いた。

「わかった。すぐに参ろう」

新九郎は老人について城下への道に戻った。

三

今夜は晴天で、月が光を投げているとはいえ、夜であるので道は暗い。だが、老爺は迷うことなく道を歩いて行き、上士の屋敷が立ち並ぶ堀留町に入った。

そして一軒の大きな屋敷に着いたが、老爺は表門ではなく裏の勝手口から中に入った。裏口からでさえ、大きく立派な造りであることがわかる見事な屋敷であった。

新九郎は千吉の案内のままに屋敷に上げられ、長い廊下を歩いて奥の客間に通された。

「こちらでお待ちを」

老人が言って出て行くと同時、女中が茶を運んで来て、新九郎の前に置いて行った。四畳半ほどの一室。新九郎は出された茶を飲みながら待っていると、程なくしてこの屋敷の主人が現れた。

その姿を見て、新九郎はすぐさま平伏した。

襖を開いて入って来たこの屋敷の主人は、次席家老の大鳥順三郎であった。

大鳥は、くつろいだ着流し姿である。新九郎を見ながら上座に腰を下ろすと、

「そなたが黒須新九郎じゃな」

「はっ」

「面を上げい。遠慮はいらぬ」

新九郎は、恐る恐る顔を上げ、大鳥の顔を見た。城中で何度か見かけてはいるが、間近で大鳥の顔を見るのは初めてであった。

がっちりとした体格。太い眉に、意志の強さを感じさせる強い眼光。大鳥の先祖は藩祖城戸頼龍の第一の重臣であり、勇猛果敢な猛将として伝えられている。その血を引いているだけあって、大鳥順三郎本人も、威風堂々とした風貌をしていた。

その大鳥が、表情を和らげて言った。

「さて、黒須新九郎。すでに察しているとは思いますが、その方の横領及び抜け売りの嫌疑を証拠不十分としたのは僕じゃ」

やはり、と思いつながら新九郎は頷いた。

「ありがとうございます」

「一応訊いておくが、そなた、まことに横領や抜け売りはしておらぬであろうな？」

大鳥は真つ直ぐに新九郎の目を見つめた。

「当然でございます」

新九郎は、きつぱりと言いつつ切った。

「さようか。僕は信じるぞ。そなたの祖先、黒須作十郎が頼龍公より剣の奥義を伝授さ

れた話は、僕もよく知っておる。その作十郎の子孫が、不正などするはずはない。それに、そなたの顔を一目見ればわかる。不正をするような男の顔ではないわ」

「ありがとうございます」

新九郎は思わず目頭が熱くなった。

「だがな、それを言いたいが為にそなたを呼んだわけではない。僕は半強引にそなたを釈放させたが、微塵も安心はできん。そなた、このままでは切腹は確実ぞ」

「え？」

新九郎がぼかんとすると、大鳥は呆れたように、

「なんと。陥れられたことを自覚しておりながら呑気な奴じゃの。目付衆が調査するとは言っておるが、そなたの無実を明らかにするどころか、更なる証拠を捏造してそなたを切腹に追い込むであろう」

「そんなまさか」

「大目付の石川は無いと思うが、横目の佐久間は完全に小田内膳に取り込まれておると僕は見ている。他に数人の徒目付もな」

「小田内膳……筆頭家老の小田さまでしょうか？　ということとは……」

新九郎が顔色を変え、大鳥は腰帯に挿した扇子を取り出して畳に立てた。

「そうよ。そなたを陥れたのは上司の郡奉行松山帯刀と、それに結託した勘定奉行柿崎忠兵衛、そして黒幕は小田内膳で間違いないまい」

「なんと」

「小田内膳は確かに優秀で、ご先代さまに拔擢されて、数々の改革案を成功させて藩の財政を立て直した。だが、その後がいかん。先の殿が亡き後、今の殿がまだ年少であるのいいことに、派閥を作って藩政を牛耳っておる」

「はい」

「それだけでも藩にとつては悪しきことなのだが、そこに謎が一つある。小田はあちこちにかかなりの大金をばらまいて人を取り込み、派閥を急拡大させているようだが、小田は筆頭家老とはいえ、拔擢された一代家老だ。元は小身であるが故に禄高はわずかに五百石。役高を足してもそのような金があるわけがない。ではその金はどこから出てる？」

大鳥順三郎が鋭い目で新九郎を見ると、新九郎は息を呑んで、

「よくあるのは、城下の富商からの賄賂、或いは……小物成の運上銀などの横領」

「それだ。実は僕は、数年前から小田の動きに不審を感じて密かに調べておるのだが、どうも賄賂や横領などをしている節がある」

「では、今回の鉢窪村の件も、裏で小田さまが松山さまを操って横領し、それが露見しそうになったので鉢窪村の担当である私に罪を着せた、ということでしょうか」

「それだけではなく、勘定奉行の柿崎とその下の産物方も結託しておるであろう」

新九郎は言葉を失った。事実ならば巨大な不正である。

「そなたも当然知っておる通り、小物成などの藩の特産物は勘定方の下の産物方に回される。勘定奉行の柿崎は小田内膳と縁戚であるのもあり、小田一派の中樞にいる。不正は、小田が柿崎と共に産物方を金と権力で抱き込み、上がって来た小物成を横領したものでないかと僕は睨んだ。しかし、目付衆とは別に僕も密かに手を回して調べたのだが、上手く隠蔽しているのか尻尾が掴めぬ」

大鳥はそこで扇子を開いた。

「そこで、僕が予先を転じて郡方を調べると、鉢窪村の小物成の納入量が急減しておることがわかった。それを追及したところ、奉行の松山があの小物成元帳を持って来て、鉢窪村担当の黒頭新九郎が帳簿を改竄して横領した、と言って来おったのじゃ」

「なんと……」

新九郎は愕然とすると同時に、心中に怒りを感じた。

「恐らく、松山帯刀も小田内膳の一派に取り込まれておるのだろう」

「そんなことが……」

「それ故にじゃ。そなた、自ら鉢窪村に調べに行かぬか？」

「私自ら？」

「そうじゃ。鉢窪村の名主のところには、小物成帳の控えを残しているのではないか？」

「ああ……そういえば、あるはずですよ」

「ならば良いぞ。柿崎や松山らも、鉢窪村の控えにまでまだ考えが及んでいない様子。」

そこで、そなたが鉢窪村の名主から控えを借りて来て、その数字を見せるのだ。そなたが本当に不正をしていたならば、鉢窪村の控えの数字も改竄しているはず。だがそれがなければ、そなたが不正をしていないという証拠にできるのではないか？ もちろんそれだけでは完全に証明はできぬが、大きな助けにはなるはずじゃ」

「なるほど」

「できれば、名主もこちらに連れて来て証言させれば尚良いであろう」

「はっ、承知しました。しかし、私は遠慮を命じられた身ですが」

新九郎が困った顔をする、大鳥は扇子をとんとんと畳に突いて笑った。

「その為に儂が、遠慮は明日、と強引に決めさせたのだ。それに、遠慮でも夜間の外出は黙認されておる。それ故、これからすぐに鉢窪村に向かうのだ」

「これから、でございますか？」

「そうじゃ。ぐずぐずしておると小田らも儂の狙いを察知して、佐久間らを鉢窪村に向かわせ、強引に控えを奪ってしまうかもしれないぞ。その前に鉢窪村へ向かうのだ」

大鳥は猛将で知られた祖先の血が濃いのか、正義感に溢れているが強引で性急なところがある。

今から行けと言う大鳥の言葉に、新九郎は顔を引きつらせた。新九郎は、押し込めから解放されたばかりである。心身の疲労はたまっているのだ。

だが、家老大鳥順三郎は、そんな新九郎の心底を見透かしたように眼光を鋭くした。

「休んでいる暇などないぞ。釈放されたその夜にそなたがすぐ動くとは、敵も思つてはおるまい。その隙を突くのだ」

——戦国武将の血だな……。

新九郎は心の中で苦笑いしながら、

「わかりましてございます」

「幸い、大目付の石川が言うには、領内で南条を見たという報告が上がっているらしく、明日は総出で南条搜索に向かうらしい」

「南条？ あの馬廻り組の南条宗之進さんでしょうか？」

新九郎は驚いて声を大きくした。

「そう、あの南条じゃ」

大鳥順三郎は険しい顔で頷いた。

南条宗之進は、新九郎もよく知っている男であった。三木辰之助も共に通っていた城下の一刀流戸沢道場の兄弟子に当たる。

南条宗之進の剣の腕は非凡どころではなく、開藩以来最強という呼び声もある天才剣士であった。

しかし、南条はそれを鼻にかけるような男ではなく、謙虚で優しく正義感に溢れている上、後輩たちの面倒見も良かった。特に新九郎は弟のように可愛がられ、新九郎もまた彼を兄のように慕っていた。

ところが、約一年前、南条は馬廻り組うままわりぐみの上役を斬り、逐電ちくでんした。南条の性格からして、突然そのような凶行に及んだのは不可解であり、藩内でも不思議がられていた。

だがともかく、南条は上役を斬った上に脱藩した罪人である。噂では江戸に潜伏しているとのことだったが、それが領内で目撃されたとあれば、目付衆が総出で捜索に出るのも当然であった。

新九郎があれこれ考えていると、大鳥が急かすように言った。

「まあ、まずはそなたのことじゃ。早う行け」

「はっ。急ぎ支度をして鉢窪村に向かいます」

「頼むぞ。これでそなたが何かを掴めれば、そなた自身の切腹を回避できるだけでなく、小田内膳らの不正を暴くことができ、奴らを一気に壊滅させて藩政を正せるかもしれぬ」元々は新九郎の冤罪のことだったが、話が急に大きくなった気がする。

そのことにやや戸惑いを覚えながら、新九郎は再び老爺千吉の案内で大鳥邸を出た。屋敷に戻ると、女中のりよが真っ先に出て来た。

「旦那さま、どうなさったのですか？ 釈放されたと聞きましたのにお戻りが随分と遅いので心配しておりました」

時刻はすでに夜四つ（午後十時）を過ぎていた。

新九郎は誤魔化すように作り笑顔を見せて、

「すまぬ……その……少し考え事をな」

「また早月川ですか」

「ああ」

間違いいではない。しかし、辰之助と濃紺装束の者との斬り合いの件、そして大鳥家老の屋敷に寄ったことは言わなかった。

だが、りよの方から心配そうに言ってきた。

「近頃、早月川の辺りは、まるで昔の笹川組のような者が現れて人を襲っていると聞いております。お気を付けくださいませ」

「ああ、わかった」

新九郎は、履物を脱いで上がりながら、

「奈美はどうした？」

「ずっと心配して落ち着かぬ様子でございましたが、今日釈放されたと聞いて安心されたのか、もうお休みになされました」

「そうか。おりよにも心配かけたな、すまぬ」

「いえ。ご無事なら何よりでございます」

「だが、釈放されたといっても安心はできません。目付衆が調査をするそうだが、それを待たなくても私は腹を切られるだけであろう」

「え？ どういうことでございますか？」

りよは不思議そうに小首を傾げた。

「まだ詳しくは言えぬが……いずれわかる。とにかく、私の命、そしてこの黒須家は滅亡の淵に立たされている。それを防ぐ為、戻ったばかりだが、少し眠ったらすぐに鉢窪村に出かける。夜が明ける前にだ」

「夜明け前に鉢窪村へ？ 慌ただしいことでございますね」

「仕方ない」

「では、わたくしもいつもより早く朝餉あさけをご用意いたしますね」

「いつもすまぬな」

「とんでもございませぬ。わたくしの方こそ、旦那さまに拾っていただいたのですから。わたくしは今のうちにできる準備をいたしますので、旦那さまはお休みくださいませ」

りよは言う、と、台所の方へ向かった。

彼女は、元からいた女中ではない。

およそ一月前、新九郎が山回りから帰って来た夜道で、道端にうずくまっている町人風の女を見かけた。それがりよだった。声をかけると、城下へ向かっている途中に足を怪我して動けなくなってしまったという。家まで送ろう、と言うと、りよは家などないと答えた。

そこで話を聞いてみると、りよは元々領内北方の湊町みなと、藤之津ふじのつの小さな商家の一人娘であつたが、商売が傾きかけていたところに両親が流行り病で亡くなり、家も潰れてしまったという。

りよの父親は偏屈者で親戚付き合いもなかった為、りよは無一文で天涯孤独となつてしまった。そこで、りよは城下に行けば何かしらの奉公の口があると思い、一人で城下へ向かった。

しかし、その途中で運が悪かったのか良かったのか、怪我をしてしまったところを新九郎に声をかけられたのであつた。

りよの事情を聞いた新九郎は、黒須家に女中として来ないかと誘ってみた。ちょうどその頃、長年通いで来ていた下女が老齢の為に辞めたいと申し出て来ていた。

黒須家は七十石とはいえ、両親はすでになく、妹の奈美と二人だけである。時々内職もしているし、住み込みの女中一人を入れるぐらいの余裕はある。

りよが、新九郎の申し出を大喜びで受け入れたのは言うまでもなかった。

第二章 炎塵剣風の屋敷

一

二刻（約四時間）ほど眠った後、新九郎は屋敷の裏口からまだ暗い夜空の下へと出た。城を出て早月川に行った時はよく晴れた星月夜であったが、今の空は灰色の雲に覆われており、月も星も見えなかった。

——雨が降るかもな。

新九郎は、雨気を孕んだ夜空を見上げ、万が一に備えて二刀の柄に柄袋をかけた。鉢窪村は、領内南西の山と山の間に位置し、その名前の通り、すり鉢状の地形の中にある。高くはないが、山を一つ越えて行くので、城下からは歩いて一刻ほどかかる。

その途上にも、右手に一つ低い小山があり、名を甲法山という。その麓には同名の村があり、そこを通り抜けて行く折、新九郎は甲法山の山頂を見上げた。

頂には大きな屋敷が立っている。

その屋敷は重厚な鉄門を構えた上に高い堀に囲まれており、標高は低いものの山の上に立っているので、まるで戦国期の山城のようであった。

——相変わらず流斎さまのお屋敷はすごい。

新九郎は、屋敷の豪壮さに改めて感嘆した。

流斎とは、現藩主城戸政龍の伯父であり、先代藩主経龍の異母兄に当たる城戸斉龍のことである。

斉龍は、先代藩主経龍よりも七年早く生まれたが、側室の子であった。

その為、最初は世子とされていたのだが、後に正室が、当時としては高齢で経龍を産むと、その立場は微妙になり始め、結局世子から外されることとなった。

そこで、先々代は斉龍をどこか他藩の養子に、或いは幕府の旗本として取り立ててもらおうと運動したが、どれも上手く行かなかった。

——というのも、根深い理由があった。

藩を治める城戸家は、戦国期には上野国の小さな国人領主にすぎなかった。だがその初代城戸頼龍は、天正年間に徳川家康と一戦したことがあり、しかもその戦で頼龍は家康の重臣を一人討ち取った上に、家康の本隊をも追い詰めたという伝説があった。

それ故、関ヶ原の時には徳川に味方したとはいえ、幕府の中では未だに城戸家に対する冷やかな目があった。

それが今でも影響し、斉龍の他家への養子入りや旗本立家は悉く失敗し、結果的に斉龍は甲法山一帯におよそ一千五百石もの知行地を賜ってそこで暮らすこととなった。

二十代で甲法山に入った斉龍は、以後は世俗から離れて流れるがまま生きるという意

味で流斎と号し、歌や茶の湯など、芸事に生きた。

だが、先代経龍が一昨年病死して現藩主政龍が跡を継ぐと、政龍がまだ年少であるが為に、重臣たちより請われてその後見役になり、今は様々な場面で藩政に力を貸している。流斎もまた優秀であり、穏やかな人柄であることから人望が篤い。

——そうだ、小田さまの件に関して、流斎さまに相談してみたらどうだろう？

ふと、新九郎は思った。

——今度、ご家老に話してみよう。

新九郎は、我ながら良い考えではないかと思ひながら、また道を急いだ。

そして空が白み始めた頃、新九郎は眼下の朝靄あさぎりの中に鉢窪村を見透かせる峠とうげに立った。夜は明けたが、空には灰色の雲が広く垂れ込め、陽光は薄い。

鉢窪村の名主は西村弥左衛門という。

弥左衛門は四十過ぎで、名主だが少しも偉ぶったところがなく、性格は穏やかで礼儀正しい。

新九郎が初めて役目で来た時も、親切丁寧に村や仕事に関することを教えてくれた。そうして何度も訪れるうちに、新九郎と弥左衛門は身分の垣根を越えて親しくなり、共に趣味の川釣りを楽しんだりするような仲になった。

村に入ると、新九郎はすぐに西村弥左衛門の屋敷を訪ねた。

戦国時代には祖先がこの辺りを束ねていた地侍じざむらいであっただけに、敷地は武家屋敷のように広い。

訪いを入れると、中年の女中がまだ眠そうな顔で戸を開けたが、

「まあ、これは黒須さま。こんな早くから如何されましたか」

と、驚きながら新九郎を中へ入れた。

「弥左衛門どのに急用があつてな。このように朝早くから申し訳ない。まだお休みであらう故、起こさずとも良い。板の間で待たせていただく」

新九郎は、履物を脱いで玄関に上がった。

「いえ、旦那さまはもう起きていらっしゃいます」

「なに？ 随分と早いな」

「はい、いつもはまだ眠っておられるのですが、今日は珍しく夜が明ける前に起きて来られました」

「ならば事は早い」

「お知らせして参りますので、お待ちください」

下女は新九郎を奥座敷へ案内すると、そのまま弥左衛門に知らせに行つた。程なくして、弥左衛門が奥座敷に現れて向かいに座つた。

「これは黒須さま、お早いですな。どうなさいましたか」

早朝の突然の訪問だが、弥左衛門は特に驚いた様子もなく笑顔を見せた。

「ちと、深刻な事態が起きてな。弥左衛門どのに話があつて参つたのだ」
 「おや、深刻な事態とは」

顔をしかめる弥左衛門に、新九郎はこれまでの事情を話して聞かせた。

「というわけで、まずは昨年の小物成帳の控えを見せてもらいたいのだが」

新九郎が言うと、弥左衛門は顔を青くして両手をつき、いきなり額を畳につけた。

「も、申し訳ございませぬ。実は、ちょうど次に黒須さまがお見えになったらお詫び申し上げようと思つていたのですが、あいにく、うちの下女が先日ごみと共に間違えて燃やしてしまったのでございます」

「なに……」

新九郎は思わず声を大きくした。ぐらりと眩暈めまいがするような感覚を覚えた。

「もとはといえば、私がいらなくなった書類を燃やすよう命じていたところに、手違いで控えも交ぜてしまつていたのです。まことに申し訳ございませぬ。罰ならば受けます」
 畳に額を擦り付けて謝る弥左衛門を見て、新九郎は呻いた。

「うむ……そうか……」

小物成の控えを紛失してしまった場合の罰則などない。

新九郎としては怒りたいところであつたが、そこは堪えるしかなかった。

「では……他に何か、納入量がわかるような物はないか？ 控えの下書きとか」

「他に……」

弥左衛門は顔を上げ、眉根を寄せて考え込んだが、

「申し訳ございませぬ、下書きなどはなく、他にも思い当たるようなものは……」

「ないか」

「はい。まことに申し訳ございませぬ」

弥左衛門は再び畳に額を擦り付けた。

しばし沈黙が流れた後、新九郎は弱り切つた顔で、

「とりあえず、手間をかけるが共に城下まで来てもらえまいか？」

弥左衛門は、ぱつと顔を上げて、

「ええ。どこへでもお供いたします」

「すまぬな。その前に、村の様子など見せてもらえるかな。織機おりきや作業の状況などを見てみたい」

「もちろんでございます、ご一緒いたします」

新九郎は、弥左衛門と共に屋敷を出ると、すでに起きて炊事や作業をしている村の家々を見て回つた。

どの家にも織機が一台あり、作業を中断したまま休んだと思われるところや、早めに朝食を済ませてまさにこれから仕事をしようとしている若い娘などがいた。

しかし、特にこれといって変わった様子はない。

新九郎はしばらく各家を見回つた後、弥左衛門を振り返つて、

「蔵を見せてくれるかな」
「はい」

村で収獲した青苧、各家で織った縮は、出来上がり次第、弥左衛門の屋敷の隅にある土蔵に保管される。

二人は再び弥左衛門の屋敷の長屋門を潜り、隅の土蔵へ向かった。弥左衛門が門を外して縮の蔵の中に案内する。

蔵の中は、四方の壁の上方に明かり取りの小窓があるが、今日は曇天であるので朝陽が射し込まず、暗くひんやりとしていた。

土蔵の壁に沿って、村人によって織られた縮がいくつも積み上げられている。

「黒須さま、申し訳ございませんが、朝の仕事がございまして、少し屋敷に戻らせていただいても構いませぬか？」

弥左衛門が後ろから言った。

新九郎は振り返り、申し訳なさそうな顔をして、

「もちろんだ。時間を取らせてすまぬ」

「ついでお城へ向かう支度もして参ります」

弥左衛門はそう言うで一礼し、蔵を出て行った。

——しかしこれは本当に困った。

新九郎は蔵の中を見回した。

新九郎の無実をよく証明できるであろう小物成帳の控えがないのだ。

——とりあえず今月の見込み量を計算して……弥左衛門どのに共に来てもらって……。

新九郎は、積まれている縮を見ながら、あれこれと思案に耽った。

すると、突然背後でがたん、と音がした。

振り返ると、蔵の戸が閉じられていた。次に、外から門をかける音がした。

二

「どうした？ 弥左衛門どの……何を？」

新九郎は木戸に寄って声をかけたが、外から返答はない。

「弥左衛門どの！ 何故戸を閉める？」

新九郎は戸を叩いたが、やはり返事はない。

何とかして戸を開けようとしたが、門をかけられているのでびくともしない。

——一体どういうつもりだ？

新九郎は戸に手をつきながら困惑していたが、ふと不穏な気を感じて振り返った。奥の暗がりの中から黒い人影が二つ、滑るようにして姿を現した。

濃紺の上下に頭巾覆面姿である。

——蝙蝠やら燕とかいうあの連中か？

昨晚も三木辰之助が襲われていた。
近頃、夜闇の中で複数の藩士らを殺めて城下を不安に陥れている連中である。

「何者だ」

新九郎は素早く柄袋を外して捨てると、刀の鯉口を切った。

しかし相手二人は答えず、無言のままじりじりと間合いを詰めてくる。

新九郎は抜刀して正眼に構えた。

その瞬間、一つの影がさつと宙を跳んで新九郎に上段から斬りかかった。

新九郎は剣を左上へ振って斬撃をはね返すと、左へ回りながら右へ剣を薙いだ。

しかし黒い影はそこになく、剣は空振りした。

同時、背後に剣気を感じて、振り返りざまに剣を水平に振った。

もう一人がいつの間にか背後に回って袈裟に斬りつけて来ていた。

間一髪であった。刃が激突し、青い火花が薄闇に弾けた。

新九郎は後ろに飛んで、二人との間合いを取った。

二人とも、濃紺の覆面の間から覗く眼に不気味な殺気が光っている。

「貴様らは何者だ。ここで私を待ち伏せていたのか？」

新九郎はふうつと息を吐いて、再び問いかけた。

だが、当然二人は答えず、刀を構えながらじりじりと摺り足で寄ってくる。

その時であった。

「新九郎！」

と、新九郎を呼ぶ声に続き、剣がぶつかり合う激しい金属音が二度、三度と聞こえた。
外でも、複数の者らが斬り合いをしているようであった。

「黒須、もう少し堪えろよ！」

聞き覚えのある大声がした。

「三木か？」

新九郎も大声で応えた。間違いなく三木辰之助であった。

「新九郎、無事か」

そう呼びかけてくるもう一人の声は、歳は新九郎より一回り以上も上だが、家が近所
なので幼少の頃より付き合いがある葦沢万次であった。

「葦沢さん！」

「待っている、今開けてやる！」

激しい金属音に交じりながら、葦沢万次が怒鳴った。だが、

「させん」

と、静かに呟きながら、濃紺装束の二人が同時に新九郎に襲いかかって来た。

新九郎は刮目し、素早く飛びながら一本の銀光をはね返し、もう一本の刃風を躲した。

一対二の斬り合いであった。

圧倒的に不利であったが、新九郎は必死に剣を振って応戦する。

と、大きな音が響いて、蔵の戸が開けられた。
 広がった薄い朝光の中から葦沢万次が身体を躍らせて来て、同時に濃紺装束の一人に豪剣を振り下ろした。

相手は真正面から受け止めて防いだが、その機を逃さずに新九郎が横腹に斬りつけた。悲鳴と共に、相手が崩れ落ちた。

「二人とも、何故ここに？」

新九郎が訊いたが、

「話は後だ。外に出よう」

万次は短く言うや、外に飛び出た。

見れば、外には同様の濃紺装束の者が三人もいて、三木辰之助が一人で奮戦している。蔵の中にはまだ一人が残って新九郎の隙を窺っている。新九郎はそれに警戒しながら、万次の後に続いて外に出た。

当然のように、残った一人も新九郎らを追って走り出て、たちまち蔵の外での乱戦が開始された。

新九郎、三木辰之助、葦沢万次の三人と、相手四人との戦いである。

人数では不利である上に、相手らは不思議な太刀筋の難敵であった。

だが、新九郎と辰之助は城下の一刀流戸沢道場で席次上位にいた名手であり、葦沢万次も道場は別であるが家中屈指の使い手として名高い。

目まぐるしく態勢を入れ替えながら互角の戦いを繰り広げた。

「貴様ら、近頃城下を騒がせている笹川組もどきの連中だな？」

距離を取って睨み合った時、新九郎が訊いた。

相手の大柄な男は、覆面の隙間の猫のような目をにやりとさせただけで答えなかった。

「私がここに来ることを知ってわざわざ襲いに来たのか？」

「……………」

「だとすれば小田家老の指図か？ お前たちは小田家老の手下か？」

すると、相手の男が初めて声を出した。というより笑い声を上げた。

「小田の手下だと？ はは、笑わせるな。小田を我々が使っているのだ」

これには新九郎はもちろん、耳にした辰之助と万次も驚いて太刀捌きが鈍った。

その隙を見て斬り込んで来た敵の刀を弾き飛ばし、後ろに飛んで間合いを取った辰之助が横目を走らせた。

「貴様らが使っているだと？ どういうことだ？ 小田さまは筆頭家老だぞ」

「そもそも奴が筆頭家老になれたのも我々のおかげのようなものだ」

大男が鼻で笑った時、万次が対峙していた相手を斬り伏せた。

「小田さまを筆頭家老にして、それを貴様らが使っているだと？ どういうことだ？」

万次は大男の方を向いて問い詰めようとしたが、大男は味方がまた一人やられたことをまずいと思ったのか、

「あの世で教えてやる」

と、剣を唸らせて新九郎に斬りかかった。

斬り合いが再開された。

しかし、三対三で人数が互角になると、徐々に新九郎たちが押し始めた。

すると、猫のような目をした大男が、業を煮やしたように叫んだ。

「もういい。燕、あつちをやれ！」

その命を受け、やや小柄な一人が無言で斬り合いの場から離れた。数の有利を得たことからここで決める、と新九郎らはその言葉の意味も考えずに斬り合いを続けたが、

「まさか！」

と、新九郎がふと気付いて叫んだ、その瞬間。

主屋の方から複数の悲鳴が上がり、爆発音と焼け焦げる臭いがした。

見れば、屋根や窓から黒い煙が立ち上っている。

「よし、退くぞ」

大柄の男が静かに命じると同時、他の一人と共にそのまま走り去った。

「ここまで来て逃がすか！」

辰之助と万次は、憤然として彼らを追った。

新九郎は黒い噴煙を上げる主屋へと走る。主屋からは、奉公人たちが悲鳴を上げながら次々と逃げ出して来ている。

立ち読みサンプル はここまで

新九郎は一人を掴まえて口早に訊いた。

「弥左衛門どののは？」

「妙な人に斬られました」

小太りの下女が身体を震わせながら答えた。

「弥左衛門どの……」

新九郎は、まだ火が回っていない戸口を睨むように見ていたが、意を決して駆け出した。小物成帳の控えない今、弥左衛門の証言だけでも貴重なのである。だがそれだけではない。役目を越えて仲を深めていた弥左衛門が斬られた上に、燃え盛る屋敷の中に取り残されている。

——民を……世話になった人を助けに行けなくて何が武士か。

その想いが、新九郎を炎の中へと突き動かした。

立派とはいえ木造の屋敷である。火は、すでに壁や柱を上り始めていた。

——これはやはり火薬か。

歪む空気の中、焼け焦げる臭いと息苦しさが新九郎の肺を苦しめた。

玄関から次の間へ、更に中の間を開けると、先ほどの燕と呼ばれた小柄な男と出くわした。その男が手に提げている刀が血に濡れているのを見た新九郎は、

「貴様……弥左衛門どのに何をした！」

と、激しく目を怒らせて剣を構えた。